

本村凌二編著

『ローマ帝国と地中海文明を歩く』

講談社 二〇一三・四刊

四六 四一五頁 二六〇〇円

二〇一二年春、東京大学のローマ史担当教授として、ローマ史の研究、教育のみならず、多数の著作によりローマ史の普及に務めてこられた本村凌二氏が定年退職を迎えられた。これを記念する本の出版を本村氏に学んだ西洋史研究者たちが提案し、これを機に本村氏が抱いていた「古代遺跡に学術的な解説を施した観光案内書」（本書「まえがき」）の構想を実現して世に出たのが本書である。

本書では、西洋史研究者がローマ帝国の支配領域にある古代遺跡を政治、軍事、社会、宗教など、さまざまな視点から解説する。これを全て詳細に紹介する紙幅の余裕はないので、ごく簡単に内容に触れながら本書で取り上げられる地を列挙する。

まずは帝国の首都ローマから、ファシスト政権が現代に甦らせた戦車競技場チルコ・マッシモ、ダルヴィンチをも悩ませたマルクス・アウレリウス帝騎馬像。ローマへの海上物流の集積地だった港湾都市オステアとポルトウス、ヴェスヴィオ山の噴火で火山灰に埋没した「愛の女神」の街ポンペイ、シチリア島に点在する劇場、ミラノに残る古代人の信仰の跡（ここまでイタリア。以下の括弧も現在の国名）。ライン川の最前線の拠点トリーア（ドイツ）。帝

国西部の交通の要衝リヨン、ローマ世界一の陶工の街ミヨー（フランス）。アンダルシア地方のローマ都市遺跡群（スペイン）。エディンバラとその周辺の要塞（イギリス）。

ここからローマ帝国東部へ。アテネの神殿と軍事施設、宗教祭儀として古代オリンピックが開催されたオリンピア、マケドニアとローマの野心の跡が残るサモトラケ、クレタ島の二大都市ゴルテュンとクノッソス（ギリシア）。小アジアの名高い託宣所の一つデイデュマ、ローマ帝国の東方の最前線の拠点アンティオキア（トルコ）。人々とともに神々も集散した文明の十字路キプロス（キプロス）。ローマ時代にも受け継がれる天文学を発展させたバビロン（イラク）。三世紀にローマ軍の要塞となったルクソール神殿（エジプト）。ローマ帝国の危機とされる時代に繁栄したドウツガ（チュニジア）。以上、二ヶ所の遺跡（群）を巡る。

本書は一般読者を対象とした「観光案内書」であるため、予備知識のない読者にも読みやすいよう丁寧な解説が施されている。それと同時に、最新の研究も踏まえた「学術的」な解説も随所に見られ、予備知識のある読者にも読みごたえのある内容となっている。また、遺跡の解説だけでなく、実際に現地を訪れた執筆者が見た風景やその場の雰囲気や描写されており、豊富な地図や写真もあつて、読者は臨場感のある紙上の旅を楽しむことができるだろう（写真がカラーでないことが残念である）。

これらの遺跡を訪れる前に本書を読めば、旅はいっそう感慨深いものとなるだろう。西洋の古代遺跡に関心はあるがなかなか現地にいく機会が得られない方も、本書を手にとってローマ帝国と

地中海文明への旅に出てみてはいかがだろうか。(丸亀裕司)